



草津の未来・いっしょに考えたい  
**夢を現実に!**

Vol. 18

2023. 4. 20

## 生活インフラの伸展

一般的に、インフラと言えば、道路やガス・水道・電気・通信施設など公共的な施設や構造物を指していますが、多様化してきた近年では、社会や生活を支える公共的な基盤や仕組みに拡大しています。

とりわけ、生活インフラの面では、学校・病院・公園などの公共施設に広がり、“それが機能しないと生活が成り立たないもの”を指すようになってきました。

この中には、企業の社会性に求めるものもありますが、それらが地域できちっと満たされているかどうか重要です。

行政と市民が連携して足りない部分を補完していくことも整備のチカラに求められていると考え、地域コミュニティの土壌を多くの方々の関わりの中で培っていくことの大切さを感じます。

このような流れのなかで、2月定例会を

振り返りますと、出産・子育てなど少子化対策として切れ目のない支援や子どもの見守りを行う防犯カメラの設置をする一方、芦浦観音跡保存整備を始めとする史跡の保存整備や2025年に開催される「わた SHIGA 輝く国スポ・障スポ」に備えた草津川跡地暫定駐車場整備や草津パーキングエリアと連携した拠点整備や草津川跡地の公園構想の推進、更には、未来社会の構築として環境省がすすめる脱炭素先行地域づくり(ゼロカーボンシティの推進)や志津運動公園整備の計画づくりなど多くの議論が交わされました。



### ひと・まち・未来 研究塾『つながり』 第2-4 講座の計画



開催日 令和5年4月25日

- 草津市第6次総合計画の学術・文化連携拠点となる舞台探索 (滋賀県(草津市)の南の玄関口構想と将来ビジョンを考える)
  - 草津パーキングエリアを起点とする交通結節点と地域振興の拠点施設用地の探訪
  - 福祉ゾーン内の施設訪問
- Z世代のキャンパスライフ (学生の学習の取り組みと余暇の過ごし方を知り、新たな感性を養う)
  - 学校訪問 (木瓜原遺跡・図書館の見学)
  - 塾生懇談会 コーディネーター (塾長) 金沢工業大学 講師 藤井健史 先生

## 市政モニタリング

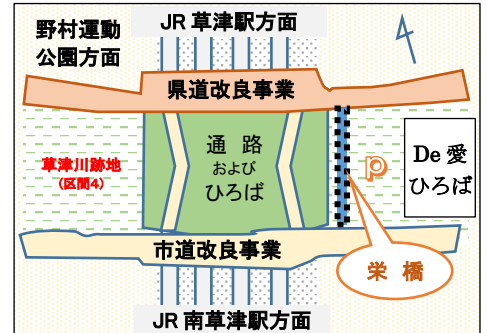
### 草津川跡地整備「区間4:JR 琵琶湖線上部工事」と「区間6:国道1号付近からの上流」

草津市第6次総合計画の柱のひとつで「にぎわい・再生プロジェクト」の「魅力」あふれるまちは、令和7年度の「わた SHIGA 輝く国スポ・障スポ」の開催が近づくにつれ、草津市の新たな拠点として草津川跡地に魅力あるスポットの整備が進んでいます。

草津川跡地は、草津川跡地利用基本計画に基づき6つの区間に区切り順次整備が進んでおり、平成29年に供用を開始した区間2(ai 彩ひろば)と区間5(de 愛ひろば)は草津市の新たな賑わいスポットとして活況を呈してきました。区間4に隣接するところでは、大江霊山寺線とJR 琵琶湖線の間で、「人が集いスポーツに親しむ」をキーワードに野村運動公園や(仮称)草津市立プールと一体的な整備をすすめています。

JR 琵琶湖線の上を通過する部分では道路を拡幅し、駅と線路を見下ろせる眺望ポイントが出来上がります。また、堤防の土手が切り下がり、ここに架かっている栄橋は撤去されて、公園内の歩行者・自転車が往来できる道路をつくるなど区画4のテーマ『環境と人の共生』するエリアとして新たな草津市の魅力が加わります。

また、栗東市と共同で整備を進めようとしている国道1号付近から上流の区間6は、『時と人の出会い』をテーマに、堤防部分を切り下げラウンドアバウトを組み入れた道路法線や国道1号の出口を設けるなどの実施設計を進めるとともに、この地の土砂を区間4の国スポ・障スポ大会用の臨時駐車場の整備用地に搬送される予定です。



### 計画道路『平野南笠線』の一部は県施工で！

令和5年度(2023年度)から令和14年度(2032年度)の10年を計画期間とする「滋賀県道路整備アクションプログラム 2023」で平野南笠線(平野地先～国道1号)が県施工の方向で進められることになりました。



滋賀県では、平成25年あたりから人口減少の傾向が見られます。一方、南部地域は、現在も人口増加が進む活気あるエリアとされていますが、慢性的な渋滞が問題となっているほか、歩行者や自転車利用の増加に対応できていない道路などの課題を抱えています。このような状況のなかで、草津市が県に要望を続けていた都市計画道路『平野南笠線』が、「滋賀県道路整備アクションプログラム 2023」の「拠点間ネットワーク整備事業」に位置付けされました。

本プログラムでは、人口減少や高齢化、激甚化・頻発化する災害への備えや新型コロナウイルス感染症をきっかけとした新生活様式へのシフトなど道路を取り巻く状況の変化を背景に“すべての人がどこにいても安全・快適に移動できる道路整備”の方向を示しています。平野南笠線は、国道1号、京滋バイパス、山手幹線・名神高速道路・京滋バイパスを交差して近江大橋に結ぶ幹線道路となるほか、名神高速道路と接する草津パーキングや草津田上インターチェンジを交通拠点に描く『滋賀県(草津市)南の玄関口構想』を大きく前進させてくれるものと期待が膨らみます。尚、湖南幹線から大江霊仙寺線に接続する区間は、草津市が施工をする方向で進んでいます。

### コラム 地域の創生：“まち”の再生で必要なことは？

私達、団塊の世代では、近所で遊びまわるのがあたり前のように育ちました。私のように回りに田畑があるところでは、家の軒先の広場が遊び場となっていました。“まち”という思い出は、遊び場所に集まった仲間の記憶と当時の情景が重なります。高校を卒業すると仲間は進学や就職で他府県に移動し、新たな生活の拠点から“まち”の様子が伝わってきます。“情景としてのまち”は、年とともに変化し“産業の振興”が働く者たちの話題の中心となりました。そして、徐々に、世界の広さを感じつつ自分の棲み処に対する関心が沸いてきました。このような形で、住んでいる地域への新たな愛着心が高まっていくというのは、誰しも感じるところではないでしょうか？京阪神のベッドタウンとして人口が増え始めた1960～70年代に、都会から移り住まれた方々から、この地が“比叡の山々と琵琶湖を眺めることのできる伸びやかな草津”が満足度として高いことを、うかがい知ることができました。私のまちで「子ども会」を知ったのは、その人たちからの「子ども達のお祭りに参加してみませんか？」という誘いでした。手製で“樽みこし”をつくり、大人と子どもが一緒になって近所を担いでまわる。お宮さんの行事見物という立場を越えて「私たちの創るまち」の地響きが聞こえてくるように感じました。その時に「大人が子どもを見守る風習は地域の文化」と教わったように思います。